

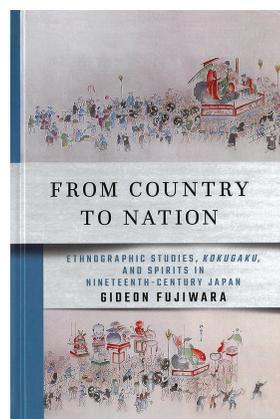
藤原義天恩

『地方の「国」から国家へ』

——十九世紀日本における民族誌学的研究、国学、神霊』

Gideon Fujiwara, *From Country to Nation:**Ethnographic Studies, Kokugaku, and Spirits in Nineteenth-Century Japan*

星山京子



Cornell University Press, 2021

本書は幕末維新期、弘前藩における平田国学の受容と展開を題材に、地方の「国」の豊かな文化や知的営為の諸相を、辺境の視点から照射する意欲作である。以後、本書の内容を紹介しながら、重要と思われる点を述べていく。

第一章「東北の「国」・津軽」では、弘前藩の歴史を、政治、学問、文化を中心に扱っている。十八世紀後半から始まったロシアの南下政策に対応しようとした幕府の命により、弘前藩では藩士以外にも多くの人々が警備のため、蝦夷地に動員され、藩内には広くアイヌとの混住がみられたという。なるほど津軽地方は江戸から見れば北奥、中央から遠いが、ロシア、アイヌ、蝦夷地など北方世界からは至近距離にある。歴史的に多様な文化が交錯する場所であったことから、民族や文化のダイバーシティを感知しやす

い地域であったと考えることができるだろう。

弘前藩の町人身分の国学者で、津軽画壇をリードした画人でもあった平尾魯仙^{ひろおろせん}は、蝦夷地における欧米船や異人の動向に強い興味を持っていた。第二章「世界における日本像と他「国」像」では、若年期から万物に対し旺盛な好奇心を抱いていた魯仙が一八五五年、蝦夷地を訪問、現地の観察を通し、日本や地域の持つ多様性に気づいていく過程が明らかにされている。

魯仙の箱館における異人、異文化取材記録というべき『洋夷茗話^{やういめい}』は、日本の「グローバル化」に対する庶民の手による数少ない民間資料である。日米和親条約により箱館は開港した。魯仙は上陸したアメリカ、イギリス、フランス、ドイツ人が国籍を越えてオープンに交流、住民と肩を並べて街を闊歩する様子や異国の

器物、服飾を絵と文章に残した。治安は良好で、「外国人との出会いが日常化している箱館に「国際社会」を発見した」（五六頁）という。

しかし蝦夷地での「グローバルな出会い」（六六頁）をきっかけに、自分が住む地域や日本、そして国学に対する魯仙の関心はより一層深化する。蝦夷地への旅の道中、津軽地方の風景、民具など人々の生活、年中行事、習俗にかんする記録を多数のスケッチとともに収め、『箱館紀行』を著した。魯仙は「蝦夷地で世界を「発見」し、日本の中に「皇国」、そして蝦夷地と津軽を「再発見」（五三頁）したのである。

平田篤胤の生涯と思想、幕末の平田国学の全国的な展開については、第三章「平田国学と全国ネットワーク」で概観され、第四章「気吹舎塾と津軽の平田門人」では、弘前藩における平田国学の受容を、津軽国学グループのリーダー的存在であつた鶴舎有節（つるやありよ）を中心に述べている。

平田国学は篤胤の死後、養子の鉄胤によって継承され、幕末維新时期、全国に波及した。有節は本州最北端の地で江戸の文化や学問を憧憬し、平田国学の私塾、気吹舎の門人となった。津軽では魯仙も含め十八名が篤胤没後の門人となっている。

平尾魯仙、鶴舎有節ら教養ある町人たちが参加した津軽の平田国学グループは、藩の支配を受けない自主的なサークルであつた。

彼らは江戸の気吹舎塾から篤胤の肖像画や著書を取り寄せ、自由に集い、学び、語つた。書物は頻繁に貸し借りされ、有節は江戸の気吹舎を主宰する鉄胤と十五年間もの長期間、書簡を交換、中央とのパイプを保ち続けたという。こうした交流により、ペリーの再来航やコレラの流行等の情報が津軽にまで伝えられた。著者の生き生きとした筆致から、中央から遠い辺鄙な地に多くの知や情報が伝播、拡散され、江戸と遜色ないハイレベルな学びが実現していたことが伝わってくる。

一方、魯仙はペリー来航や開国など、幕末維新时期の出来事にかんする外国からの書簡、諸藩の上書、随筆、地図、風説、絵画等を含む政治的な機密資料（「風説留」）を非公式に収集、『太平新話』や『明治日記』にまとめた。こうした仕事も、津軽の町人サークルでの歌会や集まりにおける地元の人々との交流や、江戸とのネットワークがなければなし得なかつたものであろう。十九世紀日本において、文化や思想、知識、情報は、江戸から地方へ一方通行的に流れたのではなく、中央―地方間で相互に循環していたのであり、互いに影響しあい、相乗効果で双方の社会発展をもたらしたと言えるのではないか。

みちのく（道の奥）と呼ばれ、特に二十世紀以降、国民国家形形成過程において、後進性が強調されてきた東北であるが、実は町人学者たちによる豊かで独立した文化、学芸が花開いていた。魯

仙は国学者、民俗学者、画人であったが、有節も俳人、書家、国学者、といくつもの顔を持っており、町人身分であったことが武士以上に自由な情報収集活動や柔軟な学びを可能にしたとも考えられる。弘前藩四代藩主・津軽信政も山鹿素行に兵学を学び、神道、茶道も修めた学者大名であったことを考慮すると、封建的身分制が強固なイメージが強い江戸社会であるが、実際の身分や職業、学統学派の区別はゆるやかで、流動的であったことが想像できる。「津軽社中は近代日本の市民社会形成の例として考慮されるべきである」（二二二頁）と看破する著者の見解は刺激的である。地方の庶民による「静かな革命」とでも言うべきだろうか。

平田篤胤は鬼神や死後の世界の存在を確信、生者が生きる「顕世」と鬼神や神霊、死者が永遠に住む世界、「幽世」が折り重なるように同時に存在する世界観を構築した。第五章「皇国日本の中に津軽を発見」では津軽地方に伝わる異事奇談や民話、怪異談を記した魯仙の著作『合浦奇談』、『谷の響』、『幽府新論』を紹介している。魯仙は沼から音楽が聞こえる話、神隠しや女が生き霊となつて人を食い殺す話などを記録、津軽の土俗で信じられてきた宗教感覚をすくいあげ、それらを平田の説に依拠して説明しようとした、と著者は指摘する。「自分たちの国である津軽を、「日本」というより大きな国家に位置づけたいと願った」（二三一頁）のである。

鶴舎有節は津軽と日本、二つの「国」への帰属意識を持っていた。第六章「神霊が住む山、風景、死後の世界」では、有節が神々や祖霊が宿る山として信仰されてきた津軽最高峰の岩木山や地域を、日本の神々が保護してくれたことに對し、敬神の念を表現したことに言及している。また『顕幽楽論』では篤胤が主張した幽冥界の実在性からさらに踏み込んで、「現し世も、亦幽り世も楽しめる我皇神の道ぞ正道」（一五一頁）と、「楽」を強調、楽しみに満ちた死後世界のイメージを創出したことは興味深い。

第七章「戊辰戦争と祭祀で明治維新を支援」では津軽から見た幕末明治の歴史を描き出している。弘前藩は戊辰戦争において、官軍側で戦った。天皇のために戦死した忠義の士の靈魂を祀る招魂祭が一八六九年、弘前城下で行われ、津軽の平田門人も参加した。日本のために殉死した靈を神格化し祀ることは、天皇への忠義の記憶を参加者や地域が共有することを意味する。こうした行為は彼らの共同体である「国」を超え、地方に「日本」意識を覚醒、ナショナル・アイデンティティの形成を助けた、とする。津軽の国学者は、江戸から遠い場所にいながらたしかに明治維新に参加し、国民国家形成の一端を担ったのである。

では、津軽の平田門人は明治の近代化をどのように経験したのだろうか。これについては第八章「近代日本社会と津軽の平田門人」で論じている。明治政府は新国家建設において、欧化政策を

採用、近代日本の「新しい夜明け」が純粋な日本文化や古代社会の復活となることを期待した津軽の国学者は、明治日本に失望した。当時の風潮に呼応するかのように、一八七一年以降、全国の平田門人数は激減、その影響力は急速に弱まっていく。欧米偏重の風潮により「日本は国学者たちの想像をはるかに超え、「見知らぬ異国の近代国家」へと変貌してしまった」（三三三頁）という。

明治政府は神仏分離令により地方の小さな神社を廃社、もしくは合社し、「一村一社」（二一五頁）に再編成、天照大神を頂点とする国家神道に統合した。「国家がかつてないほど強力に神社を操作することが可能になった」（二二四頁）ことにより、古来から地域で信仰されてきた土俗の神々が国家に組み込まれていった。つまり地方の「国」にとって、明治の近代化とは、地域で長年育んできた文化やローカルのアイデンティティが近代国家の中に吸収され、消えていくことと同義であったのである。

多くの新出史料を渉猟し、従来の研究史で注目されることが少なかった津軽の国学社中の様相を明らかにした本書は、平田国学の地方的展開はもちろん、国学研究の次のステージを拓き、新たな物語を構築するためのきっかけを与えてくれるものである。また北奥の庶民から見た幕末明治という新しい切り口により、幕末維新史を描き直すことにも成功している。

江戸時代の日本は、国持ち大名によって支配された多くの藩に

よって地方分権的な政治、経済が行われていたことを想起すれば、弘前が特殊例というわけでは決しないだろう。藩はそれぞれ個性的な学問や文化が開化し、自律した一つの「国」であったととらえるべきと考える。

本来、「日本」、「日本人」とは独自の文化と異なる歴史を持った多元的で重層的な地域社会（＝「国」）の集合体であることを本書は教えてくれる。均質な「日本」などもともと存在するはずもなく、中央集権的な国民国家形成のため、明治国家が創作した虚像にすぎないのだ。現在、東京一極集中の是正が喫緊の課題となっている。解決のためには、まず江戸や東京などを政治や文化の中心と見る中央中心の歴史観を見直すことから始めるべきではないだろうか。